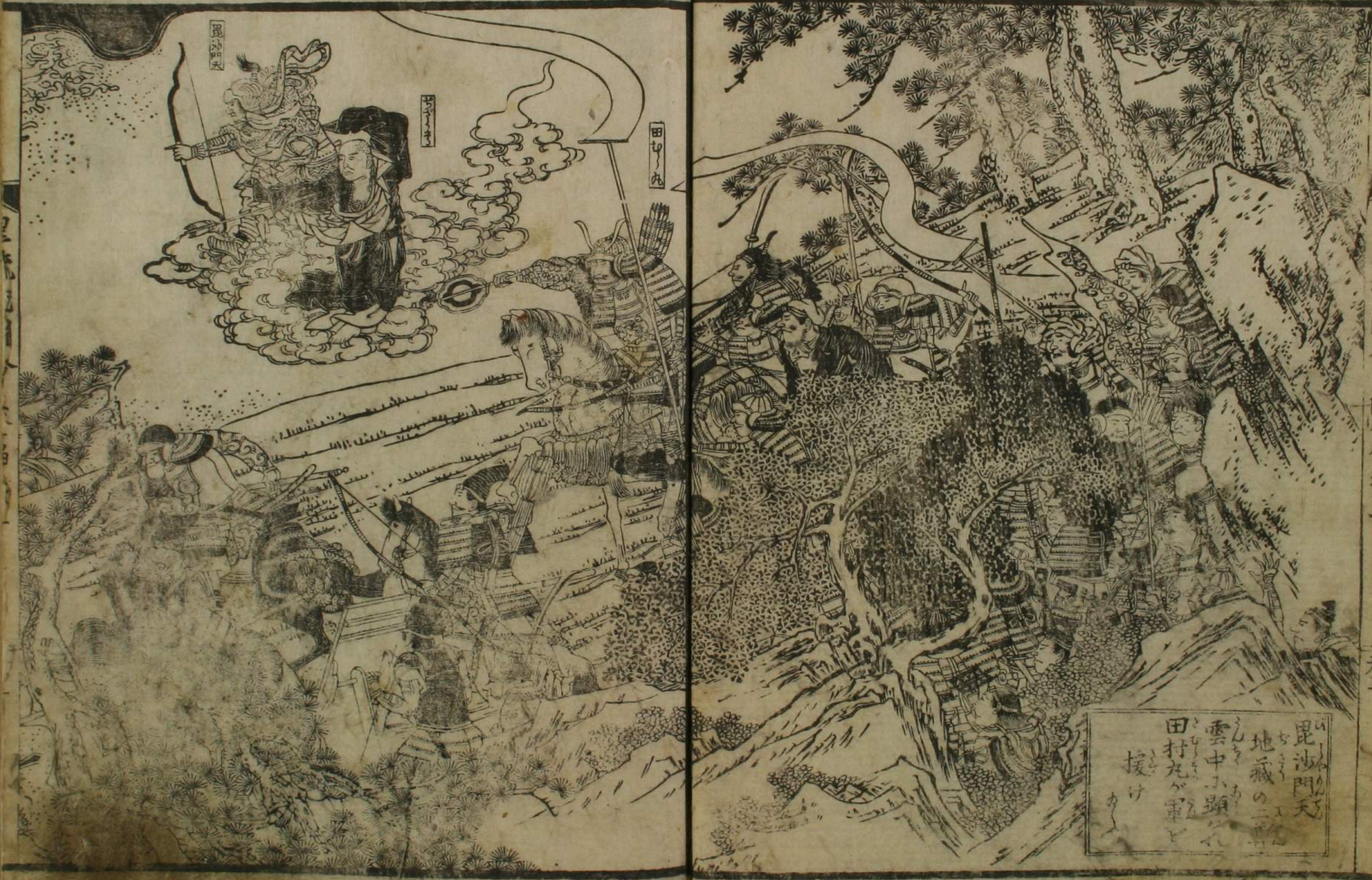




18
2109
14



術を行ひぬれども何なるも不_レ平_ニ敢_テ悪風起らむと霧降る也心中_ニ訝りあが
 射人_ノ命_ヲと京軍_ノ向_ハ雨_ノの_レ矢_ヲ射_セる_ノ多_ク彼_ノ沙_門官_司側_ノ無_レ事_ト
 袖_ヲ振_ル賊_方射_ル矢_ヲ起_テ又_テ賊_徒の_方向_ハ却_テ賊_兵を射_ル多_ク
 是_ガ射_手者_多賊_軍大_ニ殊_ヲ是_レ凡_レ吏_ノも_ト恐_惑以_テ倍_乱れ_ル
 弊_マる_ノ也_ト官_軍の_方勇_々大_軍潮_ノ浪_ガ如_ク進_進む_也其_勢以_テ決_然と_シ
 當_ガく風_ハ頻_ニ強_ク吹_クや_ト大_基盤_具高_丸ホ_モ敗_ル味_方小_鉄れ_ハ已_ハ船
 陣_ヲ臨_ンで敗_走る_ノ多_ク然_ル小_悪路_王如何_ク久_ク意_昏迷_ト途_ヲ夫_ハ己_ノ
 船_陣も退_走を却_テ官_軍の_方馬_ヲ近_入る_也田_村九_大小_悦此_機小_乘て_當
 て馬_ヲ曳_テ浴_ハり重_テど_虜ホ_トる_也田_村九_大小_悦此_機小_乘て_當
 追_結と_シ下_知を傳_ハ自身_真先_馬と_詭せ_ル弟_ヲ呂_以下_ノ三_村小_悦と_シ
 勵_ムも小_濱手_ハ進_進る_也賊_徒高_丸大_基盤_具ホ_モ敗_率と_シ俱_小濱_王ハ



皇太后

御

田村

毘沙門天
地藏の二尊
雲中小頭
田村九郎
援け

言問合巻二

九



其二

日本書紀卷之二十一

十九

逃着船より乗て陸を漕放るるとろ小早田村九が軍々々来り船を臨み
散く小矢を射りけれど賊軍孩死急小東岸漕去んとす小彼沙門と宮
司西岸小々々虚空を麾けむ忽ち逆風大吹起り船を吹戻し浪を
揚て船を洶上洶下とふと賊兵も大恐も強死船子們も船體ふあせ
つゝ櫓擡と弄ひ船を東岸漕着んす。高丸も孩死あつゝ船櫓小々々船
子小下知を傳て在ると田村九陸より遙かんで五人張の弓小矢を赤番南無
觀世音菩薩此賊將を射りけりつゝ祈念し終ひを固り響渡りて兵ど致す
小其間百間をり櫓を過ると高丸が胸板の正中と背と突つて射通した
さしも穴勇の曲者も急所の痛手小堪もあつゝ川中真逆小落底の水層と
成りる賊徒を頼り切ると首領と討き大い小氣力を落せし上逆風逆浪の爲
小船と浪間小覆されし溺死。あつゝ西岸へ吹着られて官軍小討りも有

擒とあるもまうりろ。賊方の旗頭大墓王盤具王ハ勢ハ究りて士卒五百人を引
く曹と脱弓と折り田村九の手降参り。征東使弟大副将俊哲直轄
勢も追く小弛来り。賊徒を討取生捕て今ハ手小を敵もあつゝ残る賊船
を悉く焼捨水練の者小下知して高丸が屍を尋求させて首と刻三軍大い勝
喊を造り猪軍と班りろ。小彼沙門と官司ハ何地へ往ん更ハ行方知れぬ衆人
奇異の吏小思ひ各々不審暗さつろ。斯く軍馬と休り敵の首と点檢する小
二千三百級小余り生捕と降参の者是も千余人とを記し。去程小凶徒七
ひ尽し。翌日陣拂ひし生捕降人を曳せし國府へ歸陣し賊魁惡路王引
出して誅し。大熊丸高丸が首ととも小梟木小け。高札を建て國民を安撫し。軍
率と諸方へ分遣して残黨を悉く搦捕せ。備田村九行國膽沢郡小八幡宮の
社を建高丸を射る弓矢前と奉納し。又達谷窟小都の鞍馬寺と撰りて寺と

建^{えり}之^りて毗沙^{ひしや}門^{もん}天^{てん}の像^{ざう}を安置^{あんち}し兩所^{りやうしよ}を奥^{おく}州^{しゆ}鎮^{ちん}護^ごの宮^{みや}寺^じと^し。備^{まて}中^{ちゆう}乃^の政^{せい}
吏^しを執^と治^ちめ方^{かた}端^{たん}滞^ちり^たく調^{てう}和^わし。遂^{つひ}小^{せう}征^{せい}東^{とう}使^し弟^{てい}名^な副^ふ使^しの三^{さん}将^{しやう}と俱^いふ
諸^{しよ}軍^{ぐん}と從^{まが}降^{かう}人^{にん}の重^{ちゆう}主^{しゆ}者^{しや}と率^ひて十^{じゆ}月^{げつ}上^{じやう}旬^{しゆん}奥^{おく}州^{しゆ}を發^{はつ}足^{そく}し都^とへ凱^{かい}陣^{じん}せ
られ^る。誠^{まこと}小^{せう}田^{でん}村^{むら}丸^{まる}の智^ち謀^{ぼう}武^ぶ勇^{ゆう}前^{ぜん}代^{だい}の^し例^{れい}を^まび^ぎ右^{みぎ}今^{いま}独^{ひとり}歩^{ある}の^し名^な將^{しやう}
ら^ると東^{とう}八^{はち}國^{こく}の貴^き賤^{せん}老^{らう}若^{じやく}とも知^ちもあ^らぬも感^{かん}賞^{しやう}せ^ざる^はあ^らり^き。斯^{かく}
征^{せい}東^{とう}使^しの諸^{しよ}將^{しやう}十^{じゆ}月^{げつ}上^{じやう}旬^{しゆん}小^{せう}都^と改^か著^{しやく}し。真^{まこと}小^{せう}糸^{いと}内^{ない}と夷^い賊^{さく}誅^{しゆ}小^{せう}伏^{ふく}し奥^{おく}州^{しゆ}
一^{いち}回^{かい}小^{せう}平^{へい}鈞^{きん}せ^し旨^みを奏^{そう}聞^{もん}せ^られ^るを帝^{てい}睿^{ずい}感^{かん}淺^{せん}くを軍^{ぐん}功^{こう}を深^{ふか}く御^ご賞^{しやう}
美^み在^まし疲^ひ勞^{らう}を休^{やす}む^をと。御^ご暇^{げま}を給^{たま}りて退^{たい}出^{しゆ}せ^らり^き。其^{その}後^{のち}諸^{しよ}將^{しやう}の
強^{きやう}弱^{じやく}を^まぬ^きさせ^らる^を小^{せう}大^{だい}伴^{ばん}弟^{てい}名^な敵^{てき}を^まぬ^きと初^{しよ}度^{たい}の軍^{ぐん}と仕^ま損^{そん}す^功も
なく俊^{しゆん}哲^{てつ}真^{まこと}就^{しゆ}鳥^と西^{せい}人^{にん}と田^{でん}村^{むら}丸^{まる}の令^{れい}小^{せう}順^{じゆん}の租^そ戰^{せん}功^{こう}を^ま京^{きやう}中^{ちゆう}田^{でん}村^{むら}丸^{まる}軍^{ぐん}略^{りやく}と
回^{かい}し武^ぶ勇^{ゆう}と^ま違^{ちが}ひ^て戰^{せん}每^{まい}小^{せう}勝^{しやう}夷^い賊^{さく}の張^{ちやう}本^{ほん}大^{だい}熊^{くま}丸^{まる}惡^{あく}路^ろ王^{わう}高^{かう}九^{きゆう}の三^{さん}兇^{けう}賊^{さく}

悉^{しつ}く手^てづ^く討^{たう}取^き回^{かい}中^{ちゆう}の政^{せい}更^まて調^{てう}和^わせ^られ^る。更^{さら}比^ひ類^{るい}あ^らぬ勲^{くん}功^{こう}も^もし^る。睿^{ずい}聞^{もん}小^{せう}達^{たつ}
々^々を御^ご感^{かん}斜^{しゃ}も^もと。則^{すなは}ち田^{でん}村^{むら}丸^{まる}を召^よれ^る。東^{とう}征^{せい}の軍^{ぐん}功^{こう}を御^ご府^ふ美^み在^まし。從^{まが}
三位^{さん}小^{せう}叙^{しよ}征^{せい}夷^い大^{だい}將^{しやう}軍^{ぐん}小^{せう}任^{にん}し。加^か増^{ぞう}の采^{さい}地^ちを^ま賜^{たま}り^き。田^{でん}村^{むら}丸^{まる}大^{だい}始^し
ひ厚^{あつ}く君^{くん}恩^んを拜^{らい}謝^{しゃ}し。も^もて退^{たい}出^{しゆ}せ^られ^る。次^{つぎ}小^{せう}藤^{とう}原^{げん}真^{まこと}就^{しゆ}鳥^と百^{ひやく}海^{かい}王^{わう}俊^{しゆん}哲^{てつ}
を召^よして忠^{ちゆう}賞^{しやう}を^ま下^{くだ}され^る。独^{ひとり}大^{だい}伴^{ばん}弟^{てい}名^な微^い功^{こう}あ^らる^を御^ご恩^ん賞^{しやう}の御^ご沙^さ
汰^{たい}なく閑^{かん}居^いを^まぬ^き由^{よし}の詔^{しよく}命^{めい}下^{くだ}り^き。田^{でん}村^{むら}丸^{まる}表^{へい}戎^{じゆう}奉^{ほう}り。今^{いま}度^{たい}奥^{おく}州^{しゆ}の降^{かう}人^{にん}と
る大^{だい}墓^ぼ艦^{かん}具^ぐ兩^{りやう}人^{にん}と夷^い賊^{さく}の種^{しゆ}類^{るい}を^ま見^み所^{しよ}あ^らる^を者^{しや}小^{せう}大^{だい}伴^{ばん}弟^{てい}名^なを^ま助^{すけ}命^{めい}せ
られ^る。小^{せう}官^{くわん}を授^まけ^りて奥^{おく}州^{しゆ}小^{せう}住^{ぢゆう}居^いさせ^らる^を重^{ちゆう}て夷^い賊^{さく}の乱^{らん}妨^{ぼう}せ^らぬ取^と取^とせ
大^{だい}不^ふ便^{べん}と成^なり^きと奏^{そう}聞^{もん}せ^られ^る。帝^{てい}此^{こゝ}議^ぎ如^{ごと}何^{なに}あ^らる^を命^{めい}と群^{ぐん}臣^{しん}を^まて
勅^{とく}問^{もん}あり^き。小^{せう}公^{こう}卿^{けい}の中^{ちゆう}小^{せう}大^{だい}伴^{ばん}弟^{てい}名^なが^ま縁^{えん}者^{しや}有^あり^き。今^{いま}度^{たい}の御^ご沙^さ汰^{たい}小^{せう}大^{だい}伴^{ばん}弟^{てい}名^なが^ま功^{こう}
あ^らる^を以^{もつ}て閑^{かん}居^い仰^{おほ}せ^られ^ると悔^{くわい}。田^{でん}村^{むら}丸^{まる}が^ま授^まけ^りの昇^{しやう}進^{しん}を^ま命^{めい}して降^{かう}人^{にん}を^ま助^{すけ}命^{めい}

せん願を言妨人と御評議の席に進み出彼降参す夷賊御助命の儀を
御無用するをいふ其故は元来夷賊を禽歎ひくく多慾殘忍心信義
を知らず天恩を忘却して虎狼の心を生ぜん更治定小宗門を真州放ち
取しむ久し虎を山林に放ちて却る後の害は遺を理してのみ具誅し
るを能くするといふや帝も理りし思召遂小殊戮在在定より太皇
盤具とも河内國杉山に於て死罪を行れ其余の降人田村丸をいせ悉
く助命ありし奥州へ放ち歸させしなり

延鎮語西脇士奇特 田村丸建三清水寺條

坂上田村丸東夷征伐の大功因り官位昇進し御加増と給り家敏系宋
の時を得られしを喜悅限りたり是併かゝる觀音大士のか護力小因所あり
く東山の延鎮が菴へ到られし小延鎮は己小觀音の像及び服之地藏を

門の像をも彫刻畢り田村丸の飯洛ありと待居るを大に悦びて迎請し無
事小凱陣ありと賀し多小田村丸延鎮小向ひ今度奥州の夷賊を伐平け君
の御感小顔り官位昇進し面目を世に施す小全く我力小あはれ帝の御威光
と觀世音のか護力小因りとなりそれ小就て不思議の一義あり我奥州に於て
夷賊と合戦小及りしところ何國よりともあはれ一人の沙門一人の社人と覺り人出
来り忽ち大風を起して賊軍と吹仆し又袖を振る敵より射る多矢悉く射及
て却る敵軍と射し夷賊大に恐るて斃走り濱手なる己が船へ逃れ
成味方是を追う大川のやうへ到るを夷賊の船を消去ん己が流すを到
小件の小沙門官司あり心然と現き出キを以て虚空を摩けし再暴風吹起
り逆浪多し賊船を漂し是小依て我賊軍を射落し夷賊を伐平け
を得軍勢を班めて彼沙門と官司と尋搜する小何地へ往く入るも行

方とある者あり。情思を是神佛の應化してや在り。久最不思議の事あり。や
と語られしに。延鎮は膝を拍て感嘆。実難有脚。更なる脚物。結小就。思
合と更と。拙僧脚助。情小依て。觀世音の像と刻。余れる杖を以て。脚
之の地藏多門二像と刻。いひた。然小一日地藏多門の二像と拜。いひた。更
更小や。兩像とも。脚足泥小。深より。依て不審。暗むいひ。今の脚物。結と承。分
始。疑ひの心。用れ。其時の沙門。此地藏菩薩。官司。此多門。天なり。佛
間を用。西脇を。諸再。曰。此二尊。いひ。小觀世音の化身。小最利益。多
公の信心。通して。二尊。遠く。奥州。到。いひ。公の軍。佐。朝敵。降。伏。いひ。
也。諸。木像の脚足。泥小。塗。れ。いひ。お。と。感。涙。と。いひ。小。結。と。いひ。田。村。九。信。心
肝。小。銘。で。觀。音。至。及。地。藏。毗。沙。門。を。恭。敬。礼。拜。して。佛。恩。を。謝。り。奉。り。延。鎮。の
彫刻の至妙を賞美あり。此上。佛恩報謝の。堂塔。造。と。奉。り。と。契。約。し。

て歸館あり。普く良技を買聚て音羽山運送させ。敗物を格と。百工を励して
堂塔舞臺樓門坊舎鎮守の社殿。い。玉。と。磨。り。て。山。魏。と。いひ。大。伽。藍。を
建。立。し。千。千。千。眼。の。觀。世。音。と。本。尊。と。地。藏。尊。多。門。天。を。西。脇。土。と。て。安。置。せ
られ。山。上。より。清。淨。なる。飛。泉。流。き。落。る。成。り。音。羽。山。清。水。寺。と。号。し。延。鎮。と
い。く。用。基。と。せ。れ。る。然。あ。り。より。公。来。一。千。有。余。年。の。今。小。い。る。道。堂。塔。の。壯。麗
古。小。変。ら。む。法。燈。永。く。無。明。の。闇。を。照。り。利。生。千。古。如。小。て。當。寺。の。本。尊。小
祈。誓。言。と。る。人。脚。利。益。と。蒙。ら。る。い。か。く。感。應。あ。る。更。脚。音。の。物。小。應。と。る。如。小。誠
小。觀。世。音。大。慈。大。悲。の。誓。言。何。小。疎。わ。か。り。と。い。ひ。小。殊。小。清。水。寺。の。觀。音。薩。垂
と。靈。驗。あ。る。と。い。ふ。本。尊。を。都。鄙。の。貴。賤。と。運。更。日。夜。絶。間。あ。る。と。い。ふ
乾。臨。閣。御。遊。緒。繼。昇。進。 老人壽星出現大救事
星霜中。移り延曆二十二年壬午年。六月。例。より。八。日。暑。氣。皓。く。り。り。と。れ。八。日。相。成。

天皇群臣と將て神泉苑小御幸在り。納涼の御遊を催され御入奥あせられ
因小曰天子の御遊行を御幸と申す。古く君王御遊行ある所の人民おそれ
祿とよみ賑げり。由は民悦びて君王の光臨の心を幸とする。小基つぎ
て天子の御出遊を御幸と唱へし。此稱始まら。天子の御出遊を御幸と
書仙洞の御出遊を行幸と書し。小和訓の六みおれと續り
抑神泉苑と申す。平安城始て成就せり。時周の文王の靈園小准へ。八所四方乃
池を堀築れ。池中社檀を管造して。八大龍王を鎮祭り。故小早麩の
小神泉苑。雨を祈る。小必と靈魚あり。儲池。小殿園を建乾臨園と号し
ゆ。是且い。帝ハ諸臣下と從て乾臨園。登らせり。小御遊宴を催り。小
題を賜り。公卿小詩歌を詠吟させ。其後管絃を催り。小ひ。臣下の中
小堪能の人をえ。び。これの役を命じ。茲小藤原百川。小男小從。四位下藤

原緒継といふ人あり。和琴の役あり。即ち和琴と彈ト。小元末緒継ハ雙
あれ和琴の名人なり。其れ其れ音殊小妙あり。満座の人ハ心耳と澄して。皮感
嘆せざる。ハなり。帝も緒継の和琴を深く御賞美在り。天機。小奥下
させ。小管絃畢りて。後再び御酒宴を催せ。小以て諸臣下。天盃を給り
る。列位大。小悦び難有頂戴。小以れ。酔と帯られ。時小帝群臣。小直ひ。小
を朕。小皇子。小なり。時。小先帝。小太子の御評議。存。小是。小緒継。小又。小故。小百
朕と太子。小を奏し。小緒大。小臣。小朕。小母の素姓。小早。小を。小以。小是。小を。小渡。小り。小
然。小も。小百川。小度。小の。小評。小定。小小。小志。小を。小出。小せ。小と。小五。小十日。小間。小殿。小中。小と。小退。小を。小と。小全。小夜。小睡。小眠。小す。
更。小かく。小歡。小奏。小せ。小り。小先。小帝。小其。小高。小唐。小の。小揚。小る。小と。小唐。小感。小在。小て。小遂。小小。小百川。小を。小
朕。小と。小太子。小を。小奏。小し。小朕。小不。小德。小の。小身。小を。小以。小て。小今。小百。小す。小帝。小祿。小を受。小今。小此。小御。小遊。小を。小
も。小偏。小小。小百川。小を。小賜。小り。小其。小時。小百。小川。小無。小う。小せ。小を。小豈。小更。小小。小及。小人。小や。小され。小を。小朕。小に。小

三十一

者父母して朕と違ふ者百川の如く... 茲を以て朕片時も百川を忘る...
今緒継着年たるといふも父が忠勤の故を以て今より参議小任す...
朕を異む更勿と宣ひ即座小緒継を参議小任し...
二十九才なり父の餘功に依て俄小高官小昇進...
厚く帝恩を感拜し... 去程小日暮夜少あり...
芳点ト名香を多々薫く... 金殿玉燈の影小耀れ...
卿の衣紋小芳と君臣とも小樂と與下...
大裡還脚なり... 今年十月朔日冬至小相値し...
内小内表と上りて朔旦の冬至を慶賀し...
値るいとも芽出度更めて漢土の中古より身を賀せり...
人壽星現とくれば傍天下太平の祥瑞なりと臣下一は小萬歳とぞ唱る

帝も大小睿感存天機殊小麗く詔り天下と宣く
天地覆壽時小順ひ氣と播して皇王享育...
朕寡昧を以て鴻基小爾登り方類を撫養...
方小思南薰惠澤未... 淳くも尚東戸小懸比右司奏...
老人星見ると今年十月朔日冬至也...
鼎社を早陶唐之世金精圖を表すと...
殊かり可久く可長たの功不召而方小至り...
慙思て凱澤を施し難を以て天情小答自延...
前の徒罪以下無輕重悉皆赦除く...
小錢を鑄常赦の所不免の者ハ赦の限不在と云
右の詔書を普く諸國巡りて天下大赦を行ひ...
是より依て諸州の

罪囚牢獄を出し救され悦ばむ更太りあむ。皆帝の御仁徳を待てて是れを
改り正路小飯りも。故小御代益壽平小て万民業と樂む日月相照る。皇
熟く。斯く年月推移り延暦二十四年の春とわらむ。二月の比り帝御
不例小く。せむひを緒御百官大心と痛む和氣丹波の医官小兼と良
方と撰ませて聖薬を献りぬ。神社と奉幣使を立佛院小御怒平命の大法
秘方を修せられむ。然小陰陽の博士勅文を上り今度の御怒平死霊の爲
と云ふ小いと奏す。小緒御高儀ありて。借尚早良太子の死霊の祟り
なるを。其憤霊を鎮んと區く小儀せられむ。帝聞食て大臣を召れて宜
ひ多ハ朕が今般の違例を早良太子の死霊の祟ありと儀を言す。是以の
外の僻更たり。彼太子の憤霊ハ已小先年一社の神小鎮祭り。其霊を宥むと
以來絶く崇とあまらず。然小年月久くして。今と朕小崇をふと謂おん。由

あれ義小國の財を費さん。鰥寡孤独の窮民小米錢を与へ施すと。と
勅詔在るを大臣達大不感伏し。其勅詔のちむれを緒司百官三渡
一普く鰥寡孤独の者小米錢を施されむ。其御仁徳小所小や日成追
て御怒平愈あせむひを上下皆万歳を唱て悦び。其翌年延暦二
十五年丙戌の春帝七旬小あせむ小御老年よりやきて御怒と。和
の御更もた。只後初小御のひ小三月十七日遂小山朋御たりのひ。親
王女御緒臣下ハ心を更り。此君の化沢を蒙り。天下の万民皆赤子乃父
母と亡ひ。涙泣せむハあり。斯て尊嚴と玉棺小収り山城國紀伊郡
柏原の山陵小葬りもれ。御在位二十五年宮年七十歳と。中へ入らせ
むひ。皇太子方百官百司未の筆す。跡圖小堂電り御忌明て后緒御詮
儀ありて皇太子安殿親王と帝位小御もれ。平城天白手とハ此君たり

平城天皇御即位 讓位 嵯峨天皇受禪南都擾乱

人皇五十一代平城天皇と云ふは桓武天皇第一の皇子小て御諱ハ日本根子天
排國高彦尊又の御名ハ安殿親王御母ハ藤原乙女平瀧と云ふは藤原の冬
継公の御女なり。御即位の大禮を行は延暦二十五年と改め大同元年と曆号
と改めあり御弟宮神野親王を春宮小とす。御外祖内大臣藤原冬繼公ハ
正一位太政大臣を贈りしなり。此帝ハ天性儒學と好せり。又詩文小長し。人を
御踐祚の始より大學寮と儲て諸皇子及び五位以上の子息十才小成ぬきを
学校ハ入せ經學させり。又右司小祐命と下と宣く。今世上小妖僧奸巫の徒
多くと。神呪占文小托とて妄小福を説禍を唱へ愚昧の庶民婦女の徒を
惑し賤帛と貪り取故小愚不肖の者妖僧奸巫の言と信とて國風を損じ正道
を不知甚とて益を奪うとむ。自今以後妖僧奸巫の徒を堅く禁すとあり。命じ

のす。六道の諸國小觀察使を定めり。守護國司諸官吏の私曲惡政と敗
く穢れさせむし。先東海道ハ參議從三位藤原葛野九西海道ハ參議從
三位藤原深主山陰道ハ參議從四位藤原緒繼山陽道ハ參議正四位下皇
大弟傳藤原園人北陸道ハ從四位下杉條安人南海道ハ從四位下吉備朝
臣泉等たり。如此万機の政道正しく三綱五常の道を推弘りて万民悦休
て四海波靜小いと昌平の御代たり。不時の珍更出來たり。其故と探
り度小帝の御弟伊豫親王と中光帝武の弟四の宮小て又帝殊更御電愛の
宮あり。其御威光皇太子小おこし。劣りむとて緒人尊敬して常小諸方乃
使者門前市とたり。自出度富榮のひたる小先帝崩御カハひ。後ハ日小御
威勢衰小伺候とる公卿も次第小減り。万更寂寥と成行々小伊豫親王
御心快とて樂とむと。諸更衰微とる小就く往日の威勢隆んあり。更と

思ひ出され御母藤原吉子とよふ移り変る世を恨み帝の御威光と羨み如
母子とも心頭を燃されざるが憤念積りてやがらげあぬ大望を思ひまのひ帝
を傾け奉り我万葉の位を踐むと不軌の企を心小生せられども大切乃義
あれを猥りふ口外も一むはと其更となく時緒卿の心大引弒して是彼と荷
檐の人をうらひのひるる其中小藤原宗成とり人あり生得子慈ふく他人の
富貴を妬み其身の威権を隆んおせんとす更多年あり此頃伊豫親王
の爲体大更と思ふな機ある公察し是寃竟の更よと思ひ詳と親く
親王の起居と訪ひ進せ物語の端お先帝の御代おきも時められ采のひ小
今の帝の御代となりて君の御威光漸く薄し候とる公卿も稀く小成
行以更の御痛くさよ先帝へ皇子あまご御座在中もとうる君を御電愛
在し皇太子おのまふおられ眷慮おておるくると内大臣冬継其身外照と

成て威を震んと帝と惑へ我女の腹お出生在安殿親王を皇太子お定
めんと勧めまよひ帝も冬継の約おまきまの安殿皇子と儲君とかりめい
先帝の眷慮の俣あむ君と九五の位を踐むひまを并出度おるまよ
たふあむ御謀叛を思ふもと言やとるまよ更度お及なれを伊豫親王と
渡ふ船を得るまよ大い悦びの遠心術と明しめて宗成と密謀を示
し合ひの内おて甲冑弓矢を取寄思ひ緒國の武士をうらひのひるお好
事門を出せ悪事千里をまよの早其風貌所お軀散々ると右大臣
内上右渡皮て是ハ大更の義おと致れぬまよ実否をもせれすすして
奏達せんも如何と猶口外もせと世との風聞お窺れぬまよ内上右の縁体おる
播磨國の武士何其親王より味方頼るまよと書ける宗成が密状を持参
して密お内上右呈しなれ借世上の風貌疑ふおあむとて密お内

伊豫親王隠謀を企むと奏聞ありし帝大に疑ふを以て先宗
成を賜一寄て搦捕糾向せりと宣ふと内大臣領掌一宗成が方へ使者
を遣ひ朝廷の政更お就て急命せし義あり急いで参内ありと云
々る天命の尽るところ小宗成が密謀の滅し六勢ありと云
百と心得何心なく参内しと兼て屏風の蔭に隠れ居る武士ども顯出
矢庭小捕て伏牛と搦り右大臣(斯)と云上りたるも即ち右司の手(曳)り
させ緊く糾向せしるも宗成陳謝の約なく遁まがると覺期一伊豫
親王の御頼お依て己更と得ず荷擔せし首と白状し自余の味の輩の名
まぐ逐一おやける是小依て先宗成を禁獄し親王と檢せんとて在將
安部是雄左兵衛督巨勢野足兩人の官兵百五十余人を差添親王の脚
所を取囲せしる親王斯と云ひて大に疑はれし内々の隠謀早露顯せし

あめと強だ惑ひ是ハ如何せん躊躇去むもち武士ども追くると入親王先小
御女吉子と虜小。館の男女も残れし捕右司の廳へと曳しける斯て帝ハ
群臣と召きて御詮議あり親王母子と川原寺の二房小押籠厳く監奉と
置て守せしむ諸藤原宗成逆意と勸り大罪あれし殊戮させしむを
たあれども先帝崩御なりしにていさか幾程もあはれを以て死罪一等を省
佐渡國へ流罪おせしれ其余一味の輩も罪の輕重お從ひ流刑せしむ追放し
ゆひたり。諸も親王母子の密謀の露顯せしと恨み憤りし俱小飲食と斷
終小母子とも川原寺おて餓死せしむる。噫愚あるるか伊豫親王連、早
良太子の例を知りし人倫の道を弁むと天の宮ね王位を望み、御身の
あはむ。母堂を先く親族他人おまぐ禍を及し。不弟不義の惡名を遺し千
載の青史を汚し自ら更自業自得と云ひあがし淺穢しるも更あはるる去程

小叛逆の徒亡び尽て都の騒動も静りぬ。帝ハ朝政の心を委女に於て諸
國より訟るところの紛訟を盡く御身自判断せしむ。罪を軽く賞を
重く賞を重く賞を給ひぬ。然し伊豫親王の怨霊頻々宗成なり種々乃怪
異を見し人民を悩ませし。諸人は是為死亡する者多し。皆大に怖れ愁る
大同四年の正月より帝も親王の憤靈の祟りて御怒度くお及むせし。天下乃
政事と裁判かゝるも懶く思召遂に空位を下らせし。帝祚を春宮神野
親王小養せしむ。御在位僅小四年なり。宿神野太子御即位在り。大禮
儀執行せしむ。此君を入皇五十二代嵯峨天皇とせしめり。桓武天皇第二の皇
子小て御母ハ平城天皇と曰母なり。御踐祚の後先帝平城小太上天皇の尊号

を奉りし大同四年を改め弘仁元年と改えあり。其年の秋太上天皇乃御
望ふより奉良の回都小宮室を造管あらんと。諸國より工匠諸職人
二千五百人を召上り坂上田村九藤原冬継を造管使し。藤原成を
奉行し。経管と急がせし。ひれを宮殿速に成就し。同年十月太上天皇平城
の新宮遷幸なり。小就院叅の公卿皆供奉せし。其後嵯峨天皇も
平城の新宮へ鳳輦と環し。ひて宮室の成就を賀し。是朝親の御幸ハ
起源なり。此年右大臣内大臣小紫の朝服を勅許あり。是大臣此朝服を著
する始なり。然し太上天皇ハ。聖明の君あり。や。小伊豫親王の怨霊
障得をなす。多る。平城の仙洞遷りし。後ハ放心を。御
多。以前の明德薄ら。御在位の時。多。電愛あり。藤原仲成。妹の尚
侍。女子とて容顏美麗あり。婦人有る。多。此女子面顔を。衆小勝れ。多。性

三十一
三十二
三十三

貨倭奸ちねんて己おれ劣せれる八梅やちり己おれ勝かちれる八智ち遅ちく八言ことば巧たくまし色いろと
令しと帝みかど媚めい脚あし電でん愛あい不ふ辨べんで万ま変へんを只ただ一ひと仙洞せんどうの脚あし政せい吏し八大小おほいとなく茶ち子こ心こころ
任まかせふたりて非ひ義ぎの吏しのま多おほくも君きみの脚あし意い小こ叶はひ女めあれは否いな難がたをし人ひともか
く却かへて院いん泰たいの公こう卿けい八皆みな茶ち子こ不ふ賄わい賂ろを贈たまり其その心こころ小こ合あへ吏しと欲ほつくも更さら茶ち子この
威い勢せい追おく盛さかふたるさかかが中ちゆう宮きゆう女にょ脚あしの如ごとく加かへまと茶ち子この兄あにの仲なつ成なりもや邪よこ智ち
奸かん曲きよくの倭わ人ひともて妹いもの権けん威いを借かりて身みを矯かりし諸しよ人にんを土ち芥かいの如ごとく直ちよく下くだり己おれ何なにも責せ
君きみ前まへと善よずし小こ中ちゆう己おれ被ひささるる八君きみ不ふ純じゆんして官くわん位いを損こへ偏へん唐たうの揚やう國こく忠ちゆうが所しよ
行ま小こ異いあらうともまんも太たい上じやう皇わう且かつを咎とがめむむと忠ちゆう臣しんならうとのし思おもひおろろと薄うす情じやう
仲なつ成なり曾さへて民たみ部ぶ太たい夫ふ江かう人にんの女めを娶めとりし妻さい室しつとらるる小こ其その妻さいの姨い小こ
被ひ衣いては客きやく顔げん麗れいれなありて或ある公こう卿けい不ふ嫁けて在あると仲なつ成なり一ひと度た被ひ衣いて見みて懸けん想じやう
夫おとこあらうともお悼たうらうとも數かず通とうの艶えん書しよを贈たまり又また八對たい面めんする折せつ八步ふつつけし小こ鏡きやうとも

どの被ひ衣い夫おとこあらうともお悼たうらうとも數かず通とうの艶えん書しよを贈たまり又また八對たい面めんする折せつ八步ふつつけし小こ鏡きやうとも
成なり果は堪かんと一日ひとひ被ひ衣いて我われ館くわん来きりしと強つよて一ひと室しつ伴ばんひ行ゆ百ひやく般ぱん鏡きやうしる女にょ
を猶なほも辞ことばをし仲なつ成なり怒いかれし女にょを引ひ伏ふ乗のりつつ刀たうを被ひ其その胸むねおき當あてし我われが斯か
程ほどまで鏡きやう小こ猶なほも心こころ不ふ従じゆふと今いま一ひと刀たうを刺さ殺ころすと你おまえが夫おとこをし君きみ不ふ純じゆんして重おもく刑けい小こ
行ま小こ言ことば劫せきたると女にょ只ただ注しゆ沈しんく左右さうぶの各おのおとで在あると仲なつ成なり理り不ふ及あり
姪めい一ひと辱はれし其その終しゆう苗めう置おきし遂つひ不ふ己おれが女にょをし仲なつ成なりの夫おとこを且かつをし深ふかく
仲なつ成なりを恨うらみし憤ふんんとも君きみの脚あし意い小こ入いり茶ち子こが兄あにあれを論ろんじし却かへて怨うらみし
目め入い吏しを慮り無む念ねんから其その終しゆう小こ置おきし身み本ほんの悪あく行ぎやうの外が不ふ義ぎ私し曲きよくの所しよ
行ま度た重おもりしれは諸しよ人にん内うち茶ち子こ兄あに妹いもを己おれ心こころ悪あくぬはらうとも或ある小こ嗟さ嗟さ天てん皇わうを
いはがら春はる宮みやう小こて在あると頂たうすと茶ち子こが奸かん倭わあらうとも知しると渠みちが如ごとく如ごとく
悪あくの婦と婦と君きみの脚あし側かたわら侍さむらいして八始はじめ終しゆうの脚あし為なりしととて折せつ節せつ不ふ純じゆん妻さい

しものいれども帝ハ最愛の某子あれを御許客しめたりと某子此吏を
知る春宮を深く恨み折れあふ君の絶く奏して春宮を遣退んぬると巧みなる
却て帝密位を下らせし春宮帝位即ちひくも案小相達平城の新
宮移りて後兄仲成と心を合し太上皇と帝の御中と不和し遂に太上皇
小重祚を勸奉り嵯峨天皇の御位を奪ふと恐る大望を企事し小重祚
其御心を湯し此所ハ池を掘せり彼所ハ其堂と建めんと勸めり四季折く
小姪樂橋奢の御遊をまさせしとて賤宮の費夥しく偏小殿の紂王
周の幽王の奢お比し京都より御賄金も數百萬兩及び大和都の御千支と
かり後平城より言遣はさる金銀も滞りたりとわたり是れ小依と某子又
帝の御吏を上皇へ絶く今今帝の春宮おておりる時妻小懸想しむ
い度く文を賜り又八人傳口鏡のいりとも妻の君の御恩を世承れを争り春

宮の御心小從標を汚しを奪ふれば只難面史拾侍し春宮深く妻
を恨み悪しき皇と承りし此比此御所より御賄ひの吏と京都中遣はせし
も十が一あてハ贈り給はる皆是妻と憎むと申す願ひ君再
御位小復しめ此地を留め都より万機の政事を行ひたり然ハ何あ御
遊も御意お任せませぬ此吏より睿慮小任せむとて兄仲成小宣上且給
りて近國の武士をくくせしハ京都を攻て帝を廢しめんと時小勸めま
りたれむ上皇ハ某子の愛小溺きむ其密言小御意湯湯け遂小重祚の
御心生ハ敷道の院宣を遊し仲成小給り近國の武士くくせしハ意惡
いふきよの明君も蛾眉奸佞の巧言小送ひし前車の覆りし絨をあらわれ
のふと薄情なり仲成ハ君の密銘を奉りて大和悦び須波音雲の舞を
上皇重祚しむ妹某子ハ女御となり我を攝政の極官小登り敷き回を

落ちのひたり。仲成も有合手。六十騎を従へ。武具小身と堅め。是も平城を歩
まて東國へ入ると馬と逸れ。馳行する小程。田村九一軍と率て追蒐。来り
十里。小卿言。大喜。上奸賊仲成。まるまど。坂上田村九。勅命。小依。て向
と。呼り。其声。雷霆の如く。あり。れ。馬。此声。怖きて。跳り。得。と。立。症
不成。て。嘶。り。仲成も。頭上。より。雷の。落。る。如く。覚。馬。上。小。戦。慄。た。あ。り。馬
我。拍。て。逃。入。と。身。を。操。る。も。小。早。田。村。九。ハ。駒。を。早。め。追。近。者。も。仲。成。が。手
の。者。主。を。落。さ。ん。と。仕。騎。を。り。抜。連。て。赤。て。くる。田。村。九。勅。命。と。て。例。の。大。太。刀
抜。と。か。あ。雷。光。の。如く。閃。り。て。一。太。刀。小。二。人。三。人。難。居。れ。を。残。る。兵。士。亦。大。不
怖。き。蛇。の。子。と。散。ぐ。と。主。と。捨。て。逃。散。り。其。隙。小。仲。成。ハ。よ。く。馬。と。並。み
せ。逃。る。と。田。村。九。馬。と。犯。し。追。着。猿。臂。を。伸。と。小。兒。の。と。掻。抓。と。大。地。
と。投。ぐ。も。余。り。強。く。投。ぐ。も。不。や。仲。成。ハ。五。臓。碎。け。其。血。を。吐。て。と。死。す。

うりうりの王を討きて。郎黨亦を皆散く。小落失れ。を田村九ハ仲成ガ屍と馬
小結付て曳せ。仙洞脚所を引返り。且。上皇。和。州。添。上。郡。に。到。り。所
小前路。右。近。衛。住。吉。豊。冠。二。軍。と。屯。て。道。を。遮。り。塞。た。れ。進。む。の。人。更
能。と。せ。置。置。の。方。の。敵。有。と。せ。え。其。余。四。方。の。出。口。亦。閉。り。敵。軍。固。り。し。り。あ。れ
た。大。か。く。又。も。と。と。平。城。へ。環。ら。せ。ぬ。ふ。己。小。京。軍。充。満。し。諸。卿。諸。官。人。も。か
虜。小。せ。れ。由。史。え。る。ふ。より。上。皇。途。方。小。昏。め。ひ。と。と。田。村。九。典。と。以。て。迎。へ
ち。り。茶。子。と。俱。小。常。の。脚。殿。へ。押。籠。中。の。せ。番。兵。四。方。と。衛。護。せ。隠。謀。の
余。黨。を。緊。く。尋。搜。し。る。上。皇。今。更。脚。後。悔。在。陳。謝。し。ぬ。ふ。が。脚。御。中
かり。も。ま。ま。の。を。俄。小。脚。髪。を。剃。拂。各。の。脚。出。家。の。休。小。あ。く。せ。自。ら。は。成。履
り。り。り。り。の。奸。婦。茶。子。ハ。此。脚。本。さ。ら。ん。と。我。身。の。罪。科。免。せ。ぬ。と。申。を
察。し。遂。小。自。ら。申。し。申。し。て。天。討。の。程。を。淺。猿。を。斯。て。田。村。九。綿。九

以下の緒将諸軍小虜を曳ひき成なり屍しなを昇あせり京都みやこへ凱陣かいてんし曳ひの始末しまつを
奏聞そうもんしる帝みかど緒将しよせうの勲功くんこうを御賞美ごしょうび在ありしては忠賞ちゆうしょうを給たまはり弟あにの
輩たぐひと乳問ちちとねのふふ今度こんど御謀叛ごぼうはんを勸すすめりしり八雲子やうむす仲成なかつらが所為しよゐあるよ皆白状みなびやうじやう
し衆口しゆかうにいはれを仲成なかつらが首くびを刎きりて梟木さうぼく小肆せうしさせり茶子ちやこの屍しな八野外やのゑの
捨すてしせり其餘そのあとの擒とらむる輩たぐひ八罪はつざいの狂重きやうじゆう小従せうじゆうひは或ある死刑しやうぎせり流刑りうけい追放しゆほう亦また行なは
せりひたりし春宮しゆんぐう高岳かうがく親王しんおう二点にてんの罪つみもありしままのも上皇じやうかうの白子しやくしあらぬを御
身みを愧はじりひは位ゐとし詩うたしり御出家ごしゅつがあつては空海くうかい和尚おんかうの後弟あにとし法名ほうめいとし真如しんじゆとし
改あらめりひたりし是こゝ小依せういては桓武くわんぶ天皇てんかう第三だいさんの皇子みこ大伴親王おほなづまのしんおうとし春宮しゆんぐう小立せうたひたりし
後小淳のちのしゆん和天皇わてんかうとしならばは此君こゝろわらりし抑おさへり藤原仲成ふじわらのなかつら大職おほしやく冠かん鎌足かみあし公こうの後のち風かぜ吹ふて
正三位せいさんゐ藤原宇合ふじわらのうがの曾孫そそう贈太政大臣おんたいていだいじん維い弐にの嫡男ちやくなん小せう氏うぢ素性すじやう正せい一いつ紀名家きなげの
種たねたりしるる小せう一時いつじの虎威こゐ小乗せうじやう下げ及およぶる望のぞみし起おこしり君きみ小隠謀せういんぼうとし勸すすめり奉ほうりし兄あに妹いもうと

とも天年てんねんと終はつと首くびと梟木さうぼく小掛せうかけらしては鳥とり鳥とり小せう啄つみし屍しなを野外やゐ小捨せうらしては狗いぬ狽さい
の餅もちとしなりし臭名くさなを万代まんたい小遺せういせりもも皆みな其身そのみの不良ふりやうより起おこるる所ところなりし慎しんしり恐おそるるべし
天皇てんかう賀茂かま齊院せいゐん御幸ごきやう 有智子うぢこ齊院せいゐん詩うた作しやく條じょう

弘仁二年こうにんに嵯峨さか天皇てんかうの皇女みかのみ有智子うぢこ内親王うちしんおうを以もつては賀茂かま齊院せいゐんとし伊勢いせ齋宮さいぐう
小准せうじゆんの身賀茂かま小齋院せうさいゐんを置おけり始はじめたりし此有智子こゝろ内親王うちしんおうとし中なかつ八女やち儀ぎあらぬを
御幼少ごせうしやうの時ときより文学ぶんがくと好このむるひは御幸ごきやう若わかくは在ありし頃ころ已い和漢わかんの書籍しやくしやく小通せうとうのひ
兼かては六詩文りくしぶんを善よくはるるひはるる也なり御又ごまた帝みかど殊こと更さら鐘愛しゆんあいのひたりし後年こうねん小せう弘仁こうにん
十四年じしよねんの春帝しゆんてい賀茂かまの齋院さいゐんの山さん狂きやう御幸ごきやう在ありし花はなの宴えんとし催もよほしりのひ春日山かすかひさん狂きやうとし
題だいを出いだしれり供奉くふふの月卿げつしやう雲客うんかく小詩せうしを賦ふせり身み小依せういては列位りやくゐ韻いんを探りし礎いしを定
々さるる小右智子せうぢこ齋院さいゐんも塘たう光こう行かう茶ちやの四字しじを探得たうとくのひ少時せうしのち小せう弘仁こうにん律りつの
詩うたを賦ふしりのひ即時じし小せう賀茂かまを撰りし毫こを添りし二座にざの公卿こうしやう其その連れんたりし於おはり謹いんんと感かん

帝も龍顏嚴く侍り御覽ある其御待り曰

春日山莊

寂く幽莊送樹裏
棲林孤鳥識春澤
泉聲近報新雷響
從此更知恩顧渥

仙輿一降一池塘
隱澗寒花見日光
山色高晴舊雨行
生涯何以答穹蒼

時小右智子公至十七才小どおり多。帝再三吟かひて甚く御賞美たり
の御感のあり宸翰を渾の懐と書して公至小給く其御製小曰
恭以文章著國家
即今永抱幽貞意
無事終須遺歲華

此日公至小三位の位を授め小百戸の采地と進せり。其後天長十年小位

小叙し其後存院を下りて嵯峨小静推の山莊を言々せられ授任の小兩
小風月と詠び給ふ承和十四年小春秋四十一才中葉去りひく御遺言小
其母成薄し無益の更ふ世の賤を費と更ふとられ宜いとと誠小至導
の皇女小和漢例少なる賢女小とどおり多。却て鏡弘仁二年の夏大納言右
大将正三位坂上大臣宿禰田村丸栗田の別荘小於て薨去有る。遺齡五十四才
か。帝甚く惜ませり勅使を主絹布采錢亦と若干給りたり。又勅詔あり
て其亡骸小甲冑と看せ劍鉞弓箭等と添て棺小収め宇治郡小栗栖野小
於て王城の方向かひて葬らせり。是其威靈小永く帝都を護せり。又
との睿慮ととまえたる。前小も詔して此田村丸古今獨歩の人傑小。智仁
勇三徳兼備せり。朝廷の名臣と稱せん。其も強大あり。奥州の夷賊を一戦小
伐平げ其後も奥州及び東國小平服ある。度毎小田村丸勅命と奉りて地

向う小賊軍田村丸が下向とて其叶ひがたを知て戦ふに前小退死
去或之降参し適拒敵者滅亡せざるふらうに一年上皇御謀叛の跡も藤
原仲成を追蒐て一声呼りりて其声不恐して仲成が馬瘡を至八戦慄して働
く更熊のより成以て其威武を知り昔晋の世も蔡裔とて豪傑ありて
力量膽畧衆小勝と声雷の如かりたるが蔡裔袁州の刺史とたりける比天
下小名を得る強盜二人蔡裔が家へ竊入て貨財を偷取ると梁の上小身と
潜ひ窺ひ居たるも蔡裔是を知て床を拵て大音小用賊大膽小も我賊と偷
んととてやと呼りりて二賊其声不恐して梁の上より下へ倒れ落北せんと
起更熊とて蔡裔大い笑ひ儲も臆病ある賊とゆふ今一命を助け歸り
得まると再び我家へ忠入更方疾く歸去と言れども二人も脚瘡を去
得むと春蝨をふるふと蔡裔又て二人を拘りあふの如く両手を捉提り門へ

投出されぬ入の強盜八頭をりへ後然も足どて逃歸りたることをされども
是どとて一程の勲功もゆふと田村丸の神武の尚及むとて
浅山玄五遭盜難入水 漁夫兵太湖上助浅山事
先帝城の御宇小妖僧奸巫の愚民を惑を義を毀れ緘り禁めしむ
其後ハ昔く止る小嵯峨天皇御即位の後すく緒方小破戒無慙乃僧
居有る往く尾筆の行条有る一層聞小達し弘仁三年五月有司詔命在
々々此比僧屋とも僧法を慎まむと犯戒邪嬖の史えあつて鏡法く終小托
俗家の男女戒寺院へ引入右等の不法を行すの外の曲更なり外見ハ殊勝
の俵小せ実を清浄の道場を汚す更甚む然らば自今以後男子六押小
尼寺へ入更を禁ず女子ハ無故く僧房へ入更を堅く停止せむと若尚違て
守むと破戒侵犯の僧尼ハ尽く召捕罪の重を犯しとれく罪科小行へ下



浅山玄吾

浅山玄吾

浅山玄吾

浅山玄吾
湖より
舟の
命と助
らふ

との更なれむ。右司の輩勅命を畏り官吏をふつて洛中洛外の僧房尼寺の
僧尼の行条を安んじ破戒の者八百五十余人を召捕皆其罪の涯重に依り
追放流罪死刑等を行ひたり其中小希有の悪僧三人有て嚴科所せられ
たり其犯戒の始末を尋らふ加賀國金澤の産小浅山玄吾とりてる者あり生年
二十六先祖の系圖正しく小地を領せり小孫の世となりて漸次小義微
所領の采地をも估却ひ幽小暮りたるが玄吾が父母ハ早く死去し玄吾ハ独
身となりて妻子も迎へられ玄吾つら思惟しける扁鄙れて碌くと一生を
過さんより京師へ上り藝能を習覚それを言え何方の公卿へありとも奉公せざ
と思ふ家宅私財を賣て些少の路銀を得任則古御と立出只入都を
志して旅立り往て近江路へ出つ各小負琵琶湖の風景小同を悦むを湖邊を
歩いて行ゆと志賀の里に近くある頃只已小黄昏小及び往來の人稀く小成

これむ玄吾ハ宿を求め急ぐ折もあれ忍山下の茂林の内より四五人の盜賊類
は出で玄吾を取圍て有無を問ふ吾せむ理不尽小衣服を剥取路銀をも奪
と赤裸小たて猶踏つ蹴つ歩擲し何回ともなく逃去るる玄吾ハ夢
見心地の杖柱も憑り路銀ハ錢も残らざる奪られ衣服も剥奪し
真禪一と成ひて悩ま仕然るるが夜嵐の身小まむ付心小思ひくると
我都小親類縁者もたず朋友知音もあざざる小赤裸小たて上るるも
食せんより外小せんを金かりおま中ある望を盡し更茲小及あるハ身の運の
尽くある庵一今ハ中く世の人小恥を肆さん朽惜所詮此湖水小身を沈めて死
んとの涙も佛名を唱り合掌して湖の中へ身を沈めんと船に乗りて
命數いづる及ぶるや折より一艘の漁船漕来り人の捨身せり沈んた
水中に飛込玄吾と右舟の小船小抱り立遊と我舟へ上り傾て玄吾水に吐

耳小口を寄せて敷声呼活々ふどいよど入水して幾程も間をたれど頓く息吹く
二軒りたる漁夫も舟を小者小漕せ其身ハ用意の身を採出して玄吾小服より
湯を文て成抱し如何ある事おて捨身せられやと問ふ玄吾涙あふ
圃を出て都上ん盗賊小遣り衣服金子を奪はる方あさ小投身せしめて五
一十と結をれを漁夫ハ其薄命と哀れ儲るこれハ懊悩ある事なる此比此辺の山下小
盗賊隠栖毎夜旅人を剥取との噂中黄昏よりハ往來する人も和殿
遠圃より来りさる事もあつて通りれハ盗賊小剥きあつて左有むとて賊を
世の廻り物なり身と投て死る事や有る先我家来り氣を鎮て保難せられ
よ左も右もして京奉公せしる中ふ汗下ひ進を分ると世小頼母く言々るゆ玄
吾ハ地獄おて苦菩薩お遇り大糸悦び其深情をえれ礼謝しる漁夫も玄
吾小玄吾と身小纏はせ火おあせせむとするうち船ハ堅田村なる漁夫の家の裏へど

著る斯て小者船と繋ぎ漁せ魚籠と網と成推し漁夫を擗擗とくげ
玄吾と伴ひる後戸を叩て我家へハ女室のるるハ鯨夫なる者諸至羽を
小者小倉とて電の下と焚せ其身ハ古紫衣とより出して玄吾小著せ岡戸裡
小柴おきて俱火おあつる諸も和殿の生願ハ何圃して何のあ京へ上るやと
問ふれ玄吾答て我ハ加州金沢の産して浅山玄吾と呼る者してハ先刺申
出でく若年おて父母ハ此去扁鄙の住居も懶都へ上り何の養わたりとも
習ハ相應の奉公をせん家宅綱度然沽却て路銀と都と志して此圃ま
で来り針おと盗賊小遣り此時宜小及いれ結々る至羽おて其難波あ
変ふくまの愁とせられおる如く浅猿を漁夫おれ我ハ以前ハ藤嶋
兵太とて武家の切米とも食者ある王家退將の後ハ浪りして産年お終
此浦へ来り漁を業として露命と收めらるも妻女四年以前小死去一人の女を

去々年京都へ奉公上り。身ハ鯨にて死期の来るを待のりあり。世渡の産業
とハ言まがらう。老年よりて且夕鱈魚の命を取ら罪深丸事と心小悔まぬ日
とてわたり。然不斗和殿の命と助けハ身小らうて善滅罪あり。此少や
路銭も借登り。又京小知音の者もあれ。其者の方へ頼と進む。命死あど
彼者の方へ往て奉公の義と商議せしれ。最懇切小練り。湯も沸く
とて吾小麦飯を勧め。其身も小者も小食。釣る。鮎を炙て酒を飲
し。其夜ハ王客三人枕を交て。歎きたり。吾小枕小着るも多。心神を安し
む。更不夢も結び得。眠れぬ。俣ふ来。方行末と左や右。唯ハ此らるる夜
ハ仄くと明らう。れを。至羽も起て。小者呼覚。朝餉の粥と者。さや。小程
わく。粥も熟るる。由。三人是を食し。畢り。借至羽ハ此の銀錢を。と。出。と。吾
小。与。す。一通の文書と。あ。めて。渡。此。文。書。は。懐。中。に。京。上。り。北。白。川。へ。尋。行

彼者小らうて身の在着を求めら。と。残るところあり。言教れ。と。吾を
數度推し。た。誠小。御身。あり。せ。底の水屑。ある。べ。た。不測。小。一。命。と。助。さ。り
再生の太息の。あり。む。前後。より。の。御。抱。と。し。衣服。路。銀。を。借。給。り。御。石。志
礼。謝。ハ。約。小。冬。一。雞。御。深。情。小。依。て。身。の。在。着。定。ま。り。ゆ。早。速。御。礼。を。下
と。厚。く。恩。を。謝。し。礼。を。演。遂。小。辞。を。告。て。主。出。堅。田。村。を。後。小。足。て。京。都。に。至。り
て。上。り。往。て。北。白。河。へ。ゆ。兵。太。が。知。音。の。者。を。尋。る。小。左。右。あり。相。知。る。門
味。を。乞。て。對。面。し。兵。太。が。文。書。と。出。し。身。上。の。義。を。頼。り。れ。不。此。男。も。貧。人。と。ハ
又。え。あ。ら。う。律。氣。あり。男。小。て。文。書。を。讀。み。快。く。肯。ひ。和。殿。ハ。書。成。る。る。や。と。向
小。よ。う。吾。受。て。手。跡。ハ。幼。少。の。時。より。好。む。拙。れ。る。少。く。ハ。書。い。と。い。ふ。お。ど。其。幸。の
更。か。ら。近。村。小。楞。嚴。院。と。い。ふ。大。梵。刹。あり。其。寺。中。小。物。書。家。借。の。欲。れ。り。我。知
吾。の。者。頼。り。れ。我。へ。其。話。あり。和。殿。ハ。人品。も。卑。く。され。彼。寺。へ。奉。公。せ。れ。ん。

如何^{いかに}と問^とふ吾^{われ}謝^{あやま}と。身^みの難^{たが}い秋^{あき}を何^{なん}方^{かた}も苦^{くる}くを方^{かた}に置^おき
てありいと頼^{たの}むるも主^{しゅ}の男^{をとこ}点^{てん}首^{しゅ}然^{ぜん}を小^{せう}時^じ待^{たい}れよとて外^との方^{かた}へ去^さり出^でる。平^{へい}
時^じむろ有^あて一人^{ひとり}の男^{をとこ}と伴^{とも}ひく。吾^{われ}亦^{また}向^{むか}ひく。奉^{ほう}公^{こう}の管^{くだ}轄^{かつ}せらる。此人^{このひと}なり
日^ひ道^{みち}して往^ゆる所^{ところ}と言^いふと吾^{われ}主^{しゅ}の好^{こう}意^いを謝^{あやま}す。彼^{かの}男^{をとこ}小^{せう}従^{じゆ}ひく。標^{ひょう}嚴^{げん}院^{いん}
到^{いた}る。小^{せう}堂^{どう}塔^{たつ}巍^{ゑい}たる大^{だい}寺^じ中^{ちゆう}小^{せう}僧^{そう}坊^{ぼく}數^{すう}軒^{けん}あり。其^{その}中^{ちゆう}の普^ふ賢^{けん}院^{いん}
と標^{ひょう}札^{さつ}あり。房^{ぼう}伴^{ばん}ひ入^い住^{ぢゆう}僧^{そう}と何^{なん}れ然^{ぜん}と吾^{われ}と呼^よび住^{ぢゆう}僧^{そう}小^{せう}見^{けん}存^{ぞん}る。此^{この}僧^{そう}
清^{せい}真^{しん}と号^{ごう}せり。吾^{われ}亦^{また}人^{ひと}品^{びん}卑^ひく。とんて國^{くに}所^{ところ}姓^{せい}名^{めい}を問^と書^{しよ}せり。せり。小^{せう}珠^{しゆ}
の外^{の外}達^{だつ}筆^{びつ}あれど清^{せい}真^{しん}の意^い小^{せう}適^{たく}ひ記^き録^{ろく}即^{すなは}ち抱^{かか}りおたれり。言^いふる。吾^{われ}亦^{また}小^{せう}珠^{しゆ}
思^{おも}へ謝^{あやま}す。官^{くわん}媒^{まい}人^{にん}の男^{をとこ}八^{はち}主^{しゅ}婦^ふりたり。其^{その}下^{した}に吾^{われ}亦^{また}身^み収^おりたる。安^{あん}堵^どの思^{おも}ふを
万^{まん}端^{たん}小心^{しやうしん}を用^{もち}ひて勤^{きん}めり。吾^{われ}亦^{また}清^{せい}真^{しん}も好^{こう}家^け人^{にん}を得^えたり。心^{こころ}怡^{よろこ}ひける。

扶桑皇統記後篇卷之二終

